

英語教師のための基本文献案内(2)

著者	加島 巧, 藤内 則光, 川島 浩勝, 江村 理奈
雑誌名	長崎外大論叢
号	17
ページ	203-212
発行年	2013-12-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1165/00000092/



*The Journal of
Nagasaki University of Foreign Studies
No. 17 2013*

英語教師のための基本文献案内(2)

加 島 巧・藤 内 則 光
川 島 浩 勝・江 村 理 奈

The Selected Bibliographical Guide for Teachers of English (2)

KASHIMA Takumi, FUJIUCHI Norimitsu
KAWASHIMA Hirokatsu, EMURA Rina

長崎外大論叢

第17号
(別冊)

長崎外国語大学
2013年12月

その第6版で、第3版からは Thomas Cable との共著になっている。第3版は日本語訳もされている。

Fernand Mosse の『英語史概説』（開文社出版 昭和52年第27刷）を翻訳した郡司利夫はおおまかな言い方と断りながらも、英語史のテキストを国別に評して次のように言う。

大学初年級で読む英語史としては、なにか隠居仕事めいたイギリス風、あるいはタイプライターで際限なく、知識をたたきだしたという感じのアメリカ流よりも、いかにもフランス式というのか、この小冊におどろくべき量の内容を、さりげなく整理して読ませる、モセの英語史のほうが、はるかに適切ではあるまいか、と考えたのであったが、(p. 251)

確かに、そうなのだ。このアメリカ流 Baugh の英語史には、恐るべき情報が込められている。しかし、バランス良く込められている点が Baugh の素晴らしさであると言えよう。英語史とは、英語という言語の歴史であるが、二つの視点から見ることがある。一つは、英語という言語の音や屈折の (sounds and inflections) 変化を歴史的に見る視点で、これは、Internal history と言う。もう一つは、External history と言い、英語の変化に影響を与えた社会的な出来事 (the political, social, and intellectual forces) を考慮に入れる視点である。Baugh の『英語史』では、この両者がおどろくべきバランスの良さで書かれている。脚注や各章の終りにある参考文献も豊富であり、それらは読者にとって非常に有益である。そういったものが不要な読者に邪魔になるものでは決してない。

ルネッサンス（文芸復興）は、14世紀から16世紀にかけてヨーロッパで起った文化運動であるが、その波がイギリスに伝わるのは16世紀の初めであった。ルネッサンスとは、古代ギリシャの学問や芸術を復興して、中世紀の暗黒時代に失われた人間性を復興しようとする運動で、そのためには、ギリシャ語とラテン語の古典語の知識が必要であった。ラテン語は中世、近代の初期にはヨーロッパ全体で第一の言語であった。ということは、当時の学者は自国語に自信を持っていなかったことを意味する。そのような時代に Thomas More (1478-1535) は『ユートピア』（1516）をラテン語で書いた。Francis Bacon (1561-1626) は、重要なものはラテン語で発表した。彼は、「ラテン語で書いておけば、この本は、後世にまで生き残るだろうが、英語で書いたのでは、そうはいかないだろう」と思っていたからだ。そのような考えを持った一人に万有引力を発見した Isaac Newton (1642-1727) もいた。

そのような考えを持つ一派もいれば、英語も立派な言語であると考える一派もあり、そのどちらが正しかったのは、その後の英語の姿を考えれば、明らかなことである。ラテン語に対する反発は16世紀の半ばに表れるが、それに力を貸したものが宗教改革であった。Richard Mulcaster (1530? -1611) が英語の洗練さを力強く宣言したのは、1582年のことで、彼のその発言は、言語上の独立宣言と言われる。

“For is it not in dede a mervellous bondage, to becom servants to one tung for learning sake, the most of our time, with losse of most time, whereas we maie have the verie same treasur in our own tung, with the gain of most ime? our own bearing the joyfull title of our libertie and freedom, the Latin tung remembering us of our thralldom and bondage? I love Rome, but London better, I favor Italie, but England more, I honor the latin, but I worship the English.” (A.C. Baugh and T. Cable, pp.202-203)

（「我々自身の国語の中に、ラテン語に劣らぬ宝が埋もれていることに気づきさえすれば、莫大な時間を損することもなくなるのに、学問のためとはいえ、莫大な時間をかけて、ほとんど一生の間わが身をラテン語に縛りつけるとは、いやはやなんという隷従の身であろうか。我々の国語には、われわれに自由と独立を与えてくれる喜ばしい資質があるのに、ラテン語は我々が隷属と束縛の身であることを思い出させるだけではないか。私はローマを愛しているが、ロンドンを更に愛している。イタリアを好きではあるが、イギリスはもっと好きである。ラテン語を尊敬するが、英語は崇拜してやまない。」『英語史』永嶋大典他訳 p. 249）

以上のような、言わば、英語の External History を Internal History の間に上手に織り込みながら Baugh はこの英語史を作り上げた。英語学史の領域にもつながる内容をも豊富に含んでいる本に仕上がっている。

現在流布しているのは、第6版であるが、初版から11章という章建ては変更せずに、改定を続けてきた。しかし、さすがに2012年に出た第6版では、新たな章が設けられた。12章として The Twenty-first Century が加えられた。（それまでの、10章は The Nineteenth Century and After であったが、第6版の10章は The Nineteenth and Twentieth Centuries と変更されている。）その中で Baugh と Cable は、20世紀の半ばになってようやく始まった英語の将来を考える新しい枠組みについても簡単に言及している。イリノイ大学の Braj B. Kachru が1985年に提案した英語圏を次の3つの circle に分類する考えも今回の改定では取り入れている。

Inner Circle: the United Kingdom, Ireland, the United States, South Africa, Australia, New Zealand

Outer Circle: India, Singapore, countries of Sub-Saharan Africa

Expanding Circle: Europe, Japan, China, Korea, many other countries

英語は変化し続けてきた。そしてこれからも変化し続けるであろう。それは社会の変化と共に。

Baugh の英語史は大学院に入る前の年に読んだ。それは3版で、この版から Baugh と Cable の共著となった。大学院では、Baugh の別な本にお世話になった。Chaucer's Major Poetry (1963) である。The Canterbury Tales の General Prologue (「総序」) と The Wife of Bath's Tale (「パースの女房の話」) を読んだ。簡潔で要を得た注に感心した覚えがある。

2. Jespersen, Otto (1924). *The Philosophy of Grammar*

Univ. of Chicago Pr Reprint 版 ISBN-10: 0226398811 ISBN-13: 978-0226398815

『文法の原理 (上・中・下)』安藤貞雄訳 岩波文庫 (2006年)

中等教育機関で英語教師になるためには、出身が教育学部であるか否かに係わらず、英語学に関する科目を義務的に履修する必要がある。英語学とは文献学と英語史を含む英語に関する言語学ではあるが、一般的には英語による理論言語学を指し、理論言語学とは英語の文法理論の研究であると説明すると最も容易に理解が得られる。

研究者であっても、私の専門は英語学である、または理論言語学である、と自己紹介することはあっても、私は文法学者であると自己紹介する研究者は最近少ない。しかしながら、研究室で理論言語学

を修めることによってよりも、その理論言語学が通過してきた伝統的科学英文法を学習した方が、実際の教育の現場では指導の役に立つことが多いのは紛れもない事実である。

The Philosophy of Grammar (以下 *Philosophy*) の著者の Jespersen は紛れもなく英文法学者である。安藤貞雄氏による優秀な訳本もあるが、訳者の安藤氏もまた高名な英文法学者である。生成文法家の英語知らずと言われて久しいが、最近研究対象が多言語化し、ますます数学的な洞察が必要となった生成文法の研究に疲れた研究者に、この本を生成文法の知見で再分析することなく読破することをお勧めする。教育と研究と畑が違って、英語に係わるものすべては、英語をもっと深く知りたいと言う探究心を持って学習を始めたはずである。その意味で、この本に書かれていることは決して時代遅れではなく、教室に持って帰る知識が得られれば、それは最先端の知識なのである。

内容解説

この本では特に形式と意味、三階位説、ジャンクションとネクサスについて大変興味深い理論が展開されている。特にネクサスの解説が重要である。一部の英語受験参考書もネクサスという語で SVOC の文型の目的語 O と二次述語 C の関係を記述しているが、これは生成文法の小節 (Small Clause) の方が意味が近い。

ネクサスは並行するジャンクションでの三階位を、より柔軟 (pliable) で生きている (animate) ように表現したものである。*Philosophy* では、ジャンクションとネクサスで各語の階位がどうなっているかの比較はあるが、その形式に係わらず、一位語と二位語が生き生きとその関係を描写するのがネクサスであると述べられている。

単に限定修飾語を叙述修飾語に書き直しただけの文法関係(1) a, b は、(1) a に関係代名詞と繫辞を補えば同値であるように見えるが、関係代名詞節がまたネクサスとして二位語となるため、異なる文法関係となる。同様に関係代名詞を用いた表現(2) b も、関係代名詞節自体が二位語であり、表現(2) a とは異なる形式であるため、barks は barking に関連付けられない。また一般に理解されているように、「生き生きとした」ネクサスの形成には定動詞の存在(3) a, b は必要条件という訳でもない。

(1)

a. He painted *the door red*.

b. *the red door*

(2)

a. a *barking* dog

b. a dog who *barks*

(3)

a. *the Doctor* arrived

b. I saw that *the Doctor* arrived.

c. I saw *the Doctor* arrive.

d. I saw *the Doctor's* arrival.

Philosophy には文法理論が書かれているとはいえど、理論言語学の研究者が期待するような理論ではない。ジャンクションは一位語と二位語が1つの語(4)を形成するのに対し、ネクサスは常に個別に分けられている一位語と二位語を含む(5)のようなものであり、物の過程や劇のようなものである(a nexus is like a process or a drama) と説明されているが、科学的伝統英文法ではこれが理論である。

(4) a puppy = a new-born dog

(5)

a. the blue dress is the oldest

b. the oldest dress is blue

ネクサスには常に二つの要素が必要であると先に述べているが、頭の中に存在するものであると了解できるなら、言語表現では一位語のみ、二位語のみのネクサスも可能であるとも述べられている。一位語のみの例が(6) a、二位語のみの例が(6) b である。形式重視の立場をとる Jespersen には、見えないものを根拠にした分析となっている。

(6)

a. (Did they run?) Yes, I made *them*.

b. How *nice*!

ネクサスの論理的かつ科学的な説明が困難であると Jespersen も述べているが、ここにはやや規範的な側面が残っており、注意深い読み込みが必要である。

その後の文法理論との整合性

学校英文法で教授する五文型は、文が義務的に必要とする要素を並べたものである。この点において、主語と述語動詞に階位の差を認識することはない。英語統語論の知見を踏まえ、大学レベルで教授する場合は、文型とは述語動詞が義務的に必要とする要素の類型であり、むしろ述語動詞が文の中心となるが、一方でネクサスは主語を一位語であると定義してある。統語的証拠としては、動詞一語で用が済む場合より、名詞一つで足りることの方が多く、かつて主語名詞優位であったことを踏まえなければ、正確な理解を妨げる懸念がある。

生成文法標準理論の句構造規則は、節を名詞句と動詞句に書き換える。これは常に外心構造であるネクサスに似て見えるが、ネクサスを記述することを意図した規則ではない。始発記号 S を展開する句構造規則は必ず定動詞句を派生するが、ネクサスには定動詞の存在は必要条件ではない。

(6) S → NP Aux VP

同様に動詞句を展開する規則

(7) VP→V (NP) (PP) (S)

には目的語 NP が含まれるため、三階位で記述した場合動詞句全てを二位語と分析するのが適切に見えるが、以下で主語と動詞目的語、前置詞目的語は共に一位語であり、主語と述語動詞でネクサスである。

(8)

a. *I see the dog.*

b. *He runs after the dog.*

*I found the cage empty.*という文は、学校英文法は SVOC の第五文型であると教授するが、ここでは形式重視でネクサスが目的語となっていると分析する。この分析は、結果の同族目的語構文 *He drank himself drunk.*と並行する。

つまり、Jespersen のネクサスは、その後の文法理論がある種の命題として扱う文法形式である点は共通するが、それらの文法理論はネクサスを記述するためのものではない。生成文法の枠組みで、形式的な記述により結果としてネクサスを記述しようとしたものとして、S. P. Abney (1987), “The Noun Phrase in its Sentential Aspects”が挙げられようが、これは命題投射の理論である。ネクサスは Philosophy でネクサスとして研究ないし学習するほかない。また、三階位説を理解せずに、主述の形だけを手掛かりにネクサスを記述したり、更にはそれを教授の手段とするべきではない。

Modern English Grammar (以下 MEG) の後で書かれた Philosophy は、*Essentials of English Grammar* (以下 Essentials) と内容に重複があるが、Essentials は手ごろな価格の MEG の要約書で、Philosophy は MEG を補足する文法理論書と理解すれば、どのような洞察を求めてそれぞれの本を読むべきかが分かるはずである。

この本の出版後廻りから、Jespersen は人工言語であるノヴィアルの研究に傾倒していき、英文法学者と言うより言語学者となっていくが、これらの著作は科学的伝統文法の金字塔として評価されるものである。

3. 門田修平 (著) 『シャドーイング・音読と英語習得の科学』

コスモピア株式会社 2012年 ISBN978-4-86454-017-9 p.363

最近の学校英語教育の様子を見ると、指導技術としての音読やシャドーイングに対する認知度が上がってきているようである。この背景として、音読が脳の働きに良い影響を与えることを明らかにした脳科学の発達や、通訳者養成トレーニングの一つであるシャドーイングが技能運用力重視型(「できる」)の英語教育の流れに合致したことが挙げられよう。

しかしながら、教育現場で頻繁に行われている音読やシャドーイング指導に対する科学的理解はこれまであまりなされていなかった。本書は、外国語学習の本質的な部分の解明を音読やシャドーイングの研究をベースに行ったものであるが、下記の5点を根本的に問い直している。

- 1) 私たちは外国語をどのようにして記憶しているか
- 2) 外国語を自動的に使える状態にするのに、シャドーイング・音読がいかに関わっているか
- 3) 英語・日本語などの外国語学習者に対して、シャドーイング・音読がどのような効果を持っているか
- 4) リスニングなどのインプット処理だけでなく、スピーキングなどアウトプットの能力をつけるのにシャドーイング・音読がいかに貢献をするか
- 5) 流暢にコミュニケーションを規定する能力にはどのような要素が含まれているか

(p. 3)

本書は、第二言語習得、認知科学、神経科学などの分野における知見がベースになっているが、シャドーイング・音読に関する様々な実証的研究の成果が上手く整理・統合され、上述の研究課題に沿って論が展開されている。全部で6つの章からなっているが、導入部である第1章（「第二言語を「知っている」ことと「できる」こと」）では、日本人英語学習者が抱える共通の課題が明らかにされ、その解決方法について考察が行われている。そこでは、英語の発音・語彙・構文・文法などの情報を聴覚や視覚のチャンネルを通じて、知覚・理解・記憶・内在化する学習システムの考え方が導入され、そのシステムを活性化するものとしてシャドーイング・音読が位置づけられている。

シャドーイングや音読のタスクにおいて重要な役割を果たすものとして、情報の記憶・検索を挙げることができる。第2章（「顕在記憶」・「潜在記憶」とその形成：認知心理学・神経科学は何を明らかにしているか）では、1) インプット情報を受け取ってから時間が経過するとともにどのように変容するか、2) 記憶から意識的な検索の対象になるかならないか、という二つの観点（p. 33）から情報の記憶・検索が論じられている。

第3章（「自動化・運動理論・ミラーニューロンとシャドーイング・音読」）の中心的課題は、シャドーイングや音読指導の効果についての理論的考察であるが、言語処理における自動性、音声知覚に関する運動理論（言語音の知覚と生成における調音連動システム）、ミラーニューロン（他者の行為をそのまま模倣し再現する行為）などの観点から、シャドーイング・音読のトレーニングにより何故、リスニングやリーディングの力が伸びるかが考察されている。具体的に言えば、下記のような効果が論じられている（p. 135）。

- 1) 耳からの音声インプットをもとに、または眼からの視覚インプットをもとに、その言語インプットの音韻表象（phonological representation）を自動的に脳内に形成できる。
- 2) 第二言語における復唱スピードをあげ、その結果、長期記憶への転送に必要な、ワーキングメモリ内の内語反復（サブボーカーリハーサル：subvocal rehearsal）の効率化を達成できる。

第4章（「シャドーイング・音読の効果：実証データが明らかにしていること」）では、第3章の理論的考察と様々な実証的研究の結果を踏まえ、シャドーイング・音読の効果が論じられている。シャドーイングに関しては、シャドーイングの繰り返しとその再生率やシャドーイングの繰り返しと調音スピード、などについて調べた研究の成果を基に、また、音読に関しては、音読とシャドーイング両

方の効果などについて調査した研究の成果を基に論が進められている。例えば、シャドーイングの繰り返しとその再生率に関しては、ほぼ5回程度までは再生率は高くなるが、その後はさほど変動せず (p.170)、また、音読とシャドーイング両方の効果に関しては、次のような効果があることが明らかにされている。

- 1) 学習者の音読の際のインテンシティが大きくなる
- 2) 文末語の発話時間が長くなる
- 3) 一部ではあるが、文末語のピッチ幅や Clause 全体のピッチ幅が拡大する (pp. 237-238)

第5章 (「プライミングとフォーミュラ連鎖：第二言語のアウトプットを支えるシャドーイング・音読」)における中心的テーマは、インプットとアウトプットをつなぐトレーニングとしてのシャドーイング・音読の位置づけである。第二言語の産出において重要な役割 (語彙・文のコード化) を果たすとされるプライミング効果 (先行刺激が後続刺激の処理に影響を与えること) やフォーミュラ連鎖 (高頻度の語彙チャンクで、まとまりにより認知負荷が軽減される) に関する研究成果や脳科学 (fMRI) の知見を基に、シャドーイング・音読が果たす役割が論じられている。例えば、シャドーイングにおける強制的音声復唱により、音声英語の韻律パターン化や意味のチャンク化が容易になり、発話 (スピーキング) の基礎的機能 (下稽古) を果たしていることなどが述べられている。

終章 (「第二言語の心理言語学的能力」) では、外国語学習におけるコミュニケーション能力の構成要素 (文法能力等) を心理言語学的側面から再考し、それらを踏まえ、外国語学習全体におけるシャドーイング・音読の役割・位置づけを包括的に行っている。そのポイントを要約すると次のようになるであろう。

- 1) 第二言語における処理が、意識的・顕在的段階から流暢性をともなった無意識的・自動的段階に移行する際、脳内の神経ネットワークが再構築 (restructuring) されるのではないか。
- 2) そのように質的に変化する神経認知システムを使いながら我々は外国語学習を行っていると思われる。
- 3) 外国語学習における学習方法の一つであるシャドーイング・音読は、神経認知システムの質的変化に深く関与している可能性が高い。

用いられた実証的研究のデータの信頼性や量的な問題により、本書で明らかにされたことの中には仮説の域を出ていないものもあるが、第二言語習得、認知科学、神経科学などの諸分野の様々な知見を融合・統合し明らかにされたシャドーイング・音読の特徴化には説得力がある。経験的になんとなく理解されていたシャドーイング・音読の諸相が理論的にも明らかにされたことの意義は大きい。本書を読むことにより、シャドーイング・音読に対する理解が格段に進み、また、シャドーイング・音読の指導技術が向上するであろう。

4. 藤田哲也編著『絶対役立つ教養の心理学 展開編—人生をさらに有意義に過ごすために—』

ミネルヴァ書房 2013年 ISBN: 978-4-623-06345-1 p.219

本書は、教養の心理学というタイトルではあるが、学校教育や外国語習得に関する内容が取り上げられており、将来、教員を目指す学生や現役の教員の方々に役立つ内容となっている。第0章から第8章まで9つの章で構成され、9名の著者で執筆されている。各章は、教育心理学、言語心理学、認知心理学、脳の心理学、感情心理学、キャリア心理学、集団の心理学、スポーツ心理学となっており、どの章も最新の研究知見が日常生活にどのように活かせるかということをも具体的に示してある。今回は、教育現場に関連の深いものとして、第1章「教育心理学」、第2章「言語心理学」を紹介したい。

第1章「教育心理学—学びにおけるつまずきと向かいあう（植阪友理）」では、第2項「心理学から上手な勉強方法を考える」として、3つのコツがあげられている。第1のコツは、「理解する」、第2のコツは、「自分の弱点を意識化する」、第3のコツは、「他者や道具を活用する」である。第1のコツである「理解する」とは、丸暗記ではなく、「意味や構造を理解する」（p.20）ことが大切であることが示されている。第2のコツである「自分の弱点を意識化する」では、「メタ認知的方法」が紹介されている。メタ認知的方法とは、「自分の頭の中を一段上から客観的に眺める勉強法」（p.21）であるとされ、認知カウンセリングの実践研究を紹介している。「苦手単語集中法（市川，2000a）」など、自分の弱点を意識した学習方法について具体的な取り組み方も紹介され、英単語を覚えるときなどに使うことができる。第3のコツである「他者や道具を活用する」では、自分の周囲の資源を活用する方法として、図や表をかいて考えることの重要性や友人や先生といった「外的リソース」（p.24）を活用する有効性を示している。

さらに、第3項では、「日々の学習に学び方のコツを取り入れる」として、勉強方法の工夫についてより具体的に紹介されている。3-1「分かったつもりで気づく『教えるつもりで説明』」では、「～になったつもりで人に説明してみる」ことを奨励されている。他者がいない場合でも、自分一人でも説明してみることで、理解の促進や自分の弱点に気づくことにつながることを示されている。また、3-2「『生分かり』から『本わかり』へ：予習のすすめ」では、予習の効果について触れられ、3-3「頭を客観的にみるトレーニングとしての自己診断・自己評価」において、メタ認知を鍛える方法が取り上げられている。これらは、認知カウンセリングでの取り組みを参考に勉強方法についてのコツがわかりやすく取り上げられ、英語の学習にも応用できるものとなっている。学生であれば、自分の勉強方法の改善に、現役の教員であれば、生徒たちの学習のつまずきへの指導に役に立つと考えられる。

また、特に英語教師に関連が深い内容として、「第2章 言語心理学—外国語を学習せずに習得する（井上智義）」があげられる。「学習」と「習得」の違いを示し、外国語教授法の分類を行い、その特徴について検討している。また、英語のコミュニケーション能力を育成するにはというテーマで、身体の動きを活用した外国語学習方法として「全身反応学習法（Total Physical Response）」や学習環境に関して「イメージ教育」などが取り上げられている。また、感情を伴った認知の重要性を指摘し、中学生の英語学習に映画教材を用いた研究や英語落語、ロールプレイなどを活用した外国語学習の試みを紹介している。最後に「さまざまな感情を喚起させながら、外国語を身につけさせようとする試みは、まだ始まったばかりですが、一つの有効な着実な教授法となる可能性が大きいと思わ

れます。」(p.55) とまとめている。

今回は、英語教育に関連の深い二つの章を取り上げたが、他の章も学級経営や部活動の指導などにも活用できる内容となっているため、一読をお勧めしたい。